

熊本学園大学 機関リポジトリ

アルゼンチン共和国ガルアペー計画入植地に関する 調査報告 - 入植者子弟へのアンケート調査 -

著者	慶田 収
雑誌名	熊本学園大学経済論集
巻	19
号	3・4
ページ	169-219
発行年	2013-03-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1113/00000150/

【調査報告】

アルゼンチン共和国ガルアペー計画 入植地に関する調査報告 — 入植者子弟へのアンケート調査 — ¹⁾

慶 田 収

要 約

2012年8月にアルゼンチンにおける最初の日本人計画(集団)移住地、ミシオーネス州ガルアペーへの入植者子弟を対象にアンケートによる意識調査をおこなった。この調査は、ガルアペー移住地およびそこでの農業に関する入植者および/あるいはその子弟への意識調査を通して、入植開始後50年、ガルアペー入植地がどのような変化をとげ、現在の農業はどのような状況になっているのかを明らかにしようと試みたものである。その調査結果を簡潔にまとめると次のようになる。

かつては各々の入植者が個別に農業開拓を進めるなかで、協同的あるいは互助的な精神のもとで配電工事等の公共インフラの整備を行うとともに農産物とくにミカンの共同選果や共同配送をおこなうなど、「農業開拓」を軸にガルアペーのコミュニティが形成されていた。50年経た現在、入植戸数減少の結果、ミカンの共同選果や共同配送はなくなり、農業・農作業において世帯ごとに個別的な対応が求められる時代になっている。各世帯は協同で開拓を進めた、あるいは進めざるを得なかった時代から、各世帯が個別に対応する、ある意味で「普通の」農家に変身していた。同時にガルアペーの日本人・日系人コミュニティは「農業開拓」から「日本人、日系人」に軸足が移り、日本文化の伝承を通して次世代へいかに日本人、日系人としてのアイデンティティが維持されるかを模索していた。

1) 今回のガルアペー入植地での調査をおこなうにあたってアジア経済研究所地域研究センター主任調査研究員の宇佐見耕一氏、移住者一世で前在亜熊本県人会会長の古庄鏑次郎氏、弟でガルアペー入植地に父親とともに入植した古庄省吾氏にお世話になった。3氏の協力がなければ、今回のアンケート調査は困難だったと推察される。改めて深く感謝申し上げます。

またアンケート回答に協力していただいた方々にも深く感謝申し上げます。

第1節 はじめに

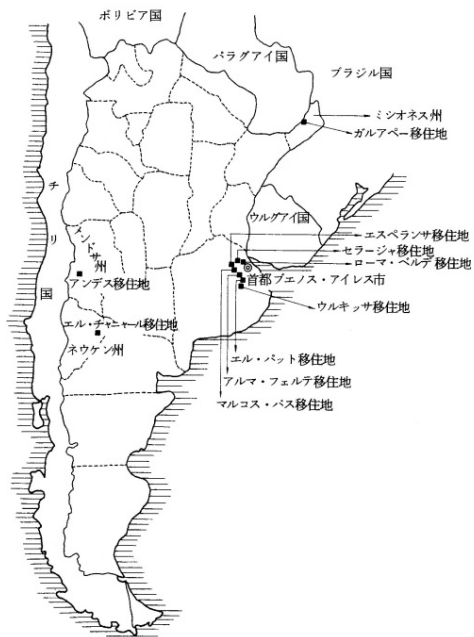
現在、日本の社会においては「日本から海外への移住」より「海外からの外国人の日本への入国・労働」に関心が高い。日本は少子高齢化社会に入り、全体の人口数は減少し始めている。人口減少に歩調を合わせるかのように労働力人口も減少していて、長期的視点から労働力不足も危ぶまれている。その解決策の一つとして海外からの労働力の導入が選択肢として議論の視野に入っている。

しかしながら、かつてヨーロッパの国々が19世紀から20世紀半ばに多くの移住者を南北アメリカに送出したように、日本も明治以降～戦後十数年間に多くの移住者をアメリカ合衆国、カナダ、ブラジル、ペルー、アルゼンチン、オーストラリアなどの国々に送り出している。その数は戦前約に65万人、戦後(1993年まで)の7.3万人である²⁾。

こうした「移住」は、経済学からの視点からは国際間の労働力の移動としてとらえられる。

アメリカ合衆国では、合法的な出稼ぎ労働者や移住者に加え非合法的な入国者数も多く、移住・移民に関する数多くの理論的研究や計量分析がなされている。G. J. Borjas (1987) は従来の「能力・意欲のある者が移住を目指す」という伝統的な見解について、計量分析を用いてこの伝統的な見解の事象が一定の条件のもとで起こることを明らかにしている。筆者も日本の場合について海外に出た移住者についてそのような分析が可能かどうかデータ・資料を探したが、残念ながら分析のために必要なデータを得ることができなかった。しかしながら、資料探索の過程において偶然にもアルゼンチンへの移住を呼びかける興味深い資料：日本海外協会連合会³⁾『アルゼンチンは招く ミシオーネス州と日本人』(1960)に出会った。これはアルゼンチ

図1 ミシオーネス州ガルアペー



出典：海外移住事業団『移住地概要昭和50年』より

2) 国際協力事業団『海外移住統計 平成6年版』を参照。

3) 現在の独立行政法人国際協力機構 (JICA) の前身の一つで、1954年に設立されている。

ン共和国 (とくに、ミシオーネス州ガルアペー (Garuhape)) への計画 (集団) 移住に関する企画と移住開始までの経緯、先に入植した先人による農業経営の紹介や営農方法などを紹介した刊行物で、ガルアペーへの移住を呼びかけたものである。この資料に出会ったことが今回の調査の発端である。

ガルアペー入植地は、アルゼンチンにおける日本からの最初の計画 (集団) 移住地である。それまではアルゼンチンへの移住は、近親者による呼び寄せか、アルゼンチン政府移民局が認める特殊な技術を有する者による移住に限られていた⁴⁾。日本政府の協力のもと、亜国拓殖共同組合⁵⁾ によるアルゼンチン政府への働きかけでアルゼンチンへの計画移住が実現している。その最初の移住地がミシオーネス州のガルアペーであった。1959 年にガルアペー移住地への入植が始まり、その 10 年後の 1969 年にガルアペー入植活動を一区切りする意味において入植者自身によって組織されたガルアペー移住地入植十周年記念行事委員会の手で『ガルアペー移住地 10 周年記念誌』(1969) が出版されている。この記念誌には、入植者の開拓体験談、コミュニティとしてのさまざまな側面での相互協力、営農方法、脱耕者 (ガルアペー入植地の開拓から離れて他の地に移り住んだ人) についての考察や小学生の詩が掲載されている。まさに入植 10 年後のガルアペー入植地の 10 年の経緯と現状をまとめたものである。

ガルアペー入植地を調査対象として調査した理由は、次のようなことによる。ガルアペーに対して計画入植地として国内での入植募集があり、入植開始して 10 年後に『ガルアペー移住地 10 周年記念誌』が刊行されている。記念誌は現在と比較するうえで入植当時の状況が入植者自身の手で細かに書きつづられていて、また筆者の知る限りにおいて集団移住地の入植者自身によって移住地のことを記録した刊行物はほかに見当たらない⁶⁾。記念誌発行後のガルアペー入植地がどのような経過をたどったのか、そのような刊行物は発行されていない。ただアルゼンチン日本人移民史編纂委員会による『アルゼンチン日本移民史第 2 巻戦後編』(2006) の第 2 章第 4 節でガルアペー移住地に関する記述があるが、これは主に入植開始後 10 年ぐらいまでの内容で、記述の年代範囲として多くが『ガルアペー移住地 10 周年記念誌』(1969) と重複し

4) 海外移住事業団ブエノスアイレス支部「アルゼンチン移住概況」、『ガルアペー移住地 10 周年記念誌』(1969)

5) アルゼンチンにおいて拓殖事業を行おうとする人に、土地を提供し、入植のための手続きや営農指導ならびに購入、販売、信用事業を行うために 1953 年に設立。『日本人アルゼンティン移住史』(1971) p.159 を参照。

6) 調査対象地域は異なるけれども、ボリビアのサンファン移住地に関する国本伊代「ボリビア国サンファン移住地 - 実態と意識調査による日本人村の素描」(『移住研究』21号 1984年) がある。日本人のアメリカ大陸への移住についてまとめたものとしてアケミ・キクムラ=ヤノ編『アメリカ大陸日系人百科事典』(2002) がある。アメリカ、ブラジル、アルゼンチン、ボリビア、ペルーなどへの移住に関する歴史が現代までとめられ、文献解題でどのような文献、資料、研究等があるかを解説している。

ている。この記念誌以後、ガルアペー移住地に関する記述が見当たらないということで今回、入植者子弟を対象としてアンケート調査を行った。

アンケート調査目的は、アルゼンチン共和国ガルアペー入植地への入植者およびその子弟への意識調査を実施することで、入植開始後 50 年どのような変化をとげ、現在の農業はどのような状況になっているのか、農業に関する入植者子弟の意識を明らかにすることであった。この調査報告は現地でのアンケート調査に基づいてガルアペー入植地の現況をまとめたものである。

調査報告はつぎのように構成されている。第 2 節でミシオーネス州の気候・風土、産業について簡単に触れたのち、『ガルアペー移住地 10 周年記念誌』（1969）や『アルゼンチンは招く ミシオーネス州と日本人』（1960）にもとづいて入植開始時 10 年間のガルアペーの状況を簡単に紹介する。第 3 節から第 5 節がアンケート調査結果にもとづく分析である。第 3 節は本人とコミュニティとの関わり合い、入植地および周辺の公共施設、交通の便についての調査、第 4 節は農業経営にかかわる内容で、入植者世代から調査対象本人への継承に関連した質問、現在の農業経営の状況に関わる調査である。第 5 節は現在どのような農作物（永年作物、短期作物、木材）を作り、どのような農機具を使用しているかを調査したものである。第 6 節は第 3 節から第 5 節の調査結果をまとめたものであり、第 7 節が結びである。

第 2 節 計画移住地：ミシオーネス州ガルアペー移住地

本節ではガルアペー移住地の位置・気候について概略を記述したのち、ガルアペーが計画移住地として決定された経緯と入植開始後 10 年の入植状況を概説する。概説するにあたって本節ではおもに『アルゼンチンは招く ミシオーネス州と日本人』（1960）、『ガルアペー移住地 10 周年記念誌』（1969）、『日本人アルゼンティン移住史』（1971）に依拠しながら説明する。

ガルアペー移住地はアルゼンチンの最北東に位置するミシオーネス州にある。州都ボサダスから東方向へ国道 12 号線にそって約 170km 行った地点で、国道 12 号線とアルト・パラナ河に挟まれた地域である。ガルアペーを擁するこの州の地形は丘陵状の起伏の多い南西から北東に細長く伸びる地形である。州は北側のパラナ河、南側のウルグアイ河に挟まれていて、それぞれの河を介してパラグアイとブラジルに接している。気候は亜熱帯に属し年間平均気温は 20℃、雨量はアルゼンチンの中でも最も多く年間約 1,500mm で多雨地である。土壌は主としてティエラ・コロラド⁷⁾と呼ばれる土壌（赤土）で、植生としては亜熱帯のバナナ、パイナッ

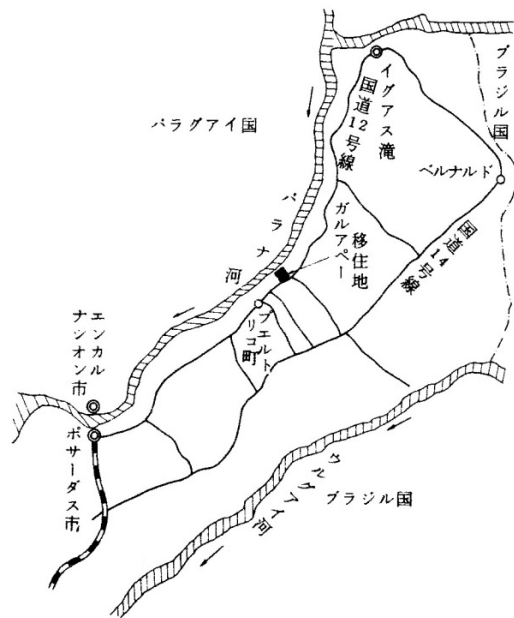
7) 国際協力事業団『移住地概要 平成 10 年版』p. 63.

ブルなどの果樹から寒い土地で栽培される大豆や小豆などいろいろな作物が良く育つ土地である。他の多くの州と異なって州全体が起伏のある丘陵状の土地であり、大地は原始林や植林そして農地によって覆われている。

現在、この州の主要産業は農業と林業、そしてそれらの産物の加工業、とくに製紙業である。おもな農産物としてはマテ茶(2010 年全国比 79.6 %), 茶(同 96 %), オレンジ(同 1.2 %), ミカン(同 12.5 %), 葉タバコ(同 22.1 %)などの果樹・作物が作付されている。林業として植林は全国比で 50.6 %⁸⁾を占めていて、パラナ松、エリオット松(米松)、ユーカリなどの樹木が木材あるいはパルプ原料のために植林されている。

今回の調査対象のガルアペー移住地は州都ポサーダスから国道 12 号線にそって北東方向へ約 170 キロ行ったところにある。ミシオーネス州には 1925 年ごろから日本人が入植していて、1950 年当時アルゼンチンのなかでも日本人移住の人数が多かった地域といわれている。この地がアルゼンチンで日本人のための最初の計画移住地として選定されたのは次のような経緯⁹⁾による。1950 年代半ばミシオーネス州に広大な土地を所有していた Luis M. Garacino 氏から日本人移住地として土地を分譲する用意があるという提案が亜国拓殖共同組合になされた。これを機に亜国拓殖共同組合は日本政府の協力のもと日本人の集団移住許可を求めてアルゼンチン政府に働きかけ、移民局に 400 家族の導入許可申請を行った。紆余曲折はあったけれども、その結果 1957 年 1 月に移民局から 400 家族の導入許可(ただし、1 州 80 家族導入を限度とする)を取得して、日本海外移住振興株式会社¹⁰⁾が 1957 年 7 月 Garacino 氏からガルアペーの

図 2 ガルアペー移住地の位置



出典：『平成 3 年移住地概要』

8) Ministerio de Economía y Finanzas Públicas, “Provincia de misiones,” 2010, p. 2.

9) この経緯については『移住地概要 平成 3 年度版』、『アルゼンチンは招く ミシオーネスと日本人』(1960), 『日本人アルゼンチン移住史』(1971)による。

10) 1955 年に法律によって設立された。目的は日本国民の海外移住を促進するため、渡航費の貸付並び

土地 3,110ha を購入して、80 家族の入植を目標とした移住地が造成された。集団移住の第 1 陣として 4 家族 20 名（菊江健三、古庄定¹¹⁾、矢島富男、松永公平の 4 氏の家族）が 1959 年 5 月に入植した後、1965 年までに 84 家族 417 名が入植して満植となった。けれども当時には栽培が盛んだったマテ茶に対して過剰生産を防ぐためにアルゼンチン政府による作付け制限、桐実（アブラギリ）の市況の悪化（価格下落）、煙草連作による地力低下や天候不順による

写真 1 入植当時のガルアペー移住地



出典：古庄鏐次郎氏の提供

煙草の作柄不良等が相次いだ。入植者の中には国内の炭鉱離職者やドミニカからの転住者等の農業経験の乏しい者も含まれていたために、ガルアペー入植地からの脱耕者¹²⁾が 1966 年、1967 年を中心に相次いだ。その結果 1969 年までに 46 戸が脱耕して入植戸数は全盛時の約半数の 39 戸に至っている。

入植成功のためには、入植時には短期作（煙草、マンジョカなど）と永年作（みかん、マテ茶、樹木など）の栽培を同時並行に進め、やがて永年作を中心にすることで営農を安定化することにあるといわれていた¹³⁾。早く現金収入が見込める短期作に労力を入れすぎると、安定収入が見込める永年作の作付けに支障がでる。「ガルアペー移住地脱耕者についての考察」¹⁴⁾では脱耕者が生じた要因について結論付けている。その主な要因を挙げると、ガルアペー移住地は永年作移住地として設定されていたのに、このことを十分理解せずに移住してきたこと、

つなぎ営農換金作物として煙草が作柄、市況ともに好調であったため、このことが誇大に喧伝され「営農し易い」というガルアペー観を作り上げたこと、短期作の煙草に専念するなかで地力の低下、天候不順による作柄不良、市況の悪化が次々と起こったこと、ブエノスアイ

に移住者及びその団体の行う農業、漁業、工業その他の事業に必要な資金の貸付を行うほか、必要に応じ、移住者を受け入れる事業に対する資金の貸付及び投資並びにその事業の経営を行うことを目的とするとされている。現在の国際協力機構の前身である。

11) 今回調査協力頂いた古庄省吾氏の父親。

12) 移住地での作物の生産を止め、他地域に転住した人。脱耕した人は必ずしも農業を止めるのではなく、他地域で農業をおこなう人、例えばブエノスアイレス郊外に転住して花卉栽培に従事した人もいる。

13) 『アルゼンチンは招く ミシオーネス州と日本人』（1960）pp. 94-95.

14) 『ガルアペー移住地 10 周年記念誌』（1969）pp. 118-123.

レス近郊地での花卉栽培の盛況が挙げられる。こうしたことで 1960 年代後半に多くの脱耕者がでて、1969 年には入植者戸数が 39 戸になっている。

入植開始 10 年後の 1970 年ごろには、入植地（コロニア）は農業を中心として 1 つのコミュニティが形成されていたようである。入植地の中心には教会が建ち、学校や警察駐在署が立ち並んでいた。子供の教育は寺子屋教育から始まって 1960 年には州立第 58 小学校が設立され、その後第 86 小学校も設立された。子供たちは自発的に生徒会を作り、草取りや木の株を掘り起こして運動場を作ったりして、いろんな活動をしていたようである。また当時近くの町へ買い出しが難しかった移住地生活のために毎月注文を受けて買い出しをするなどのために組合（農協）が作られ、売店も設置された。また婦人会活動も盛んで他地域の婦人会との交流、研修がなされていた。まだ 1970 年当時には電気はなかったけれども、海外移住事業団による補助のもと入植者の多大な協力によって 1974 年に配電が実現した。

入植地が生活の場として徐々に改善されるのとは逆に入植世帯数は次第に減少し 1983 年 4 月の時点で 21 戸 94 人となっている¹⁵⁾。この理由については第 3 節のアンケートからも推察されるように、入植地内の道路が今もって土道であり、いったん雨が降ると入植地内の道はぬかるんで車で移動することさえも難しくなることが大きな要因の 1 つと考えられる。今回調査した農家 13 戸のうち入植地内に居住しているのはわずか 6 戸であった。このように農家戸数が減少したために、農業を中心にしたコミュニティはガルアペー日本人会¹⁶⁾を中心としたコミュニティへと引き継がれていた。

第 3 節 ガルアペー入植者およびその子弟に対するアンケート調査結果パート 1

今回のアンケート調査に至る経緯は次のとおりである。アジア経済研究所の宇佐美耕一氏を通して熊本県出身の移住者 1 世で現在ブエノスアイレス在住の古庄鋈次郎氏の紹介を受けた。鋈次郎氏より氏の弟で、ガルアペー入植者世代の両親とともに中学時に入植した古庄省吾¹⁷⁾氏の紹介を受けた。古庄省吾氏にはガルアペー日本人会と筆者の間で調査に関しする仲介の労をとって頂いくとともに調査に同行していただいた。7 月 20 日に付属資料 2 のアンケート調

15) 『移住地概要 昭和 58 年版』p.162 を参照。

16) 『移住地概要 昭和 50 年版』p.142 によると、このガルアペー日本人会は 1967 年に結成されている。現在 25 世帯が日本人会の会員である。

17) 古庄省吾氏には、多大な時間を調査のために移住者の各居宅を訪問するのに車で連れて行ってもらった。公私ともに大変お世話になった。また、松ノ下アンヘル氏にも同様に車で入植地まで連れて行ってもらった。こうした協力者のもと今回の調査を実行することができた。

査協力への協力をガルアペー日本人会に提出し、7月下旬に調査協力の決定がなされた。8月1日にガルアペー日本人会会員に調査協力の文書が配布された。

今回のアンケート調査の目的はアルゼンチン共和国ガルアペー (Garuhape) 入植地への入植者およびその子弟が入植開始後 50 年どのような変化をとげ、現状はどのような状況なのかを調べることであった。調査対象者は、ガルアペー入植地に農地を所有する入植者およびその子弟で、現在ガルアペー移住地に土地を所有する農業経営戸数は 15 戸である。質問票が日本語であるため基本的に対面聞き取り調査の形式で、日本語での質問に対応可能な 13 戸について調査を行った。質問票は付属資料 3 の通りである。質問数は 44 あり、このほかに農家経営での作物や農機具等についてのアンケート表である。調査を 2012 年 8 月 14 日 (火) から 8 月 17 日 (金) にかけて居宅を訪問して聞き取り調査、一部は事前にアンケート票を預けてその後聞き取り調査を行った。1 戸あたりの聞き取り時間が約 1 時間から 1 時間半かかること、移動時間がかかること¹⁸⁾、調査対象者の仕事の空き時間を見計らったの居宅訪問ということで結果として 4 日間の調査となった。

アンケート調査内容は大きく 3 つのパートに分けられる。パート 1 (質問 1 から質問 18) は調査対象本人に関わること、本人とコミュニティとの関わり合い、入植地および周辺の公共施設、交通の便についての質問である。パート 2 (質問 19 から質問 44) は農業経営にかかわる内容で、入植者世代から調査対象本人への継承に関連した質問、現在の農業経営の状況に関わる質問である。パート 3 ではどのような農作物 (永年作物、短期作物、樹木) を作り、どのような農機具を使用しているかを尋ねている。その回答結果は付属資料 1 に示している通りである。ただし、自由記載事項については本文で説明しているので、掲載を省略している。

本節ではパート 1 の回答結果についてみる。質問 1 から質問 6 は回答者自身の属性についての質問 (入植者と回答者の関係、回答者の職業、年齢など) である。現地での調査で回答者の半数以上が入植地から別の場所に居住していたことが判明したので、付属資料 1 の質問 6 では居住年数に代えて現在の居住地を示した。また質問 1 の入植した世代から数えて何世代目かという設問では、選択肢として「1 世代目」、「2 世代目」、「3 世代目」、「その他」を想定していた。けれども親 (1 世代目) とともに入植して、開拓の労苦を知る世代として「1 世代目 (親と一緒に入植)」を追加するのが適切と考えられたのでこの項目を設けて、まとめたのが表 3-

18) 筆者はガルアペー入植地から約 25km 離れたプエルトリコ (Puerto Rico) の町のホテルに滞在した。調査対象者の約半数がガルアペー (Garuhape) に在住であったけれども、残りの半数は入植地に居住であった。このため入植地居住者の調査の場合、車で移動して 20 分程度はかかり、入植地の道路は赤土のダート道路のために家々を訪問するのにある程度の時間がかかった。

表 3-1 調査対象者の世代

調査対象者の世代	人数	割合
1 世代目	3	23.1 %
1 世代目 (親と一緒に入植)	6	46.2 %
2 世代目	4	30.8 %
3 世代目	0	0.0 %
無回答	0	0.0 %
全体	13	100.0 %

1 である。

調査対象者のうち 1 世代目の 3 名は、基本的には農業経営を子供に譲っている引退世代である。回答者の現在の職業については全員農業と回答しているが、2 世代目のうち 3 名が兼業で、日々の仕事では兼業のほうに力点があるように見受けられた。農業経営の後継者がいる、あるいは後継者の予定者がいる世帯と後継者未定の世帯では、家族の人数と家族構成の点で 2 通りに分けられる。前者の世帯では後継者と一緒に住むので家族の規模が 5~6 人と大きい。後継者未定の世帯では子供がいても後継者が未定の世帯では、夫婦 2 人の世帯になっている。2 世代目の場合は、単身者を除いて家族規模が 5~6 人以上である。

現在の居住地はおおよそガルアペー移住地とその近くの町 (プエルトリコ) の 2 つに分かれる。現地でのインタビューにより、子供が学童あるいは中学の年齢になるころがガルアペー入植地からプエルトリコなどの近くの町へ移り住むかどうかを決断する 1 つの時期であることが分かった。その理由としては入植地に居住地がある場合には車で子供を学校へ送り迎えしなくてはならなくなる、あるいは子供により良い教育を受けさせるためということが挙げられていた。その結果、調査対象者の現在の居住地分布は、ガルアペー入植地 6 世帯、プエルトリコ 6 世帯、アルカサル 1 世帯である。

質問 7 から質問 10 は、調査対象者が日本人あるいは日系人であることに関かわる質問である。調査対象者が日系人であることを意識するかという質問 7 に対しては、当然のことではあるが、13 人の中で 12 人が「強く」あるいは「少し」意識しているという結果であった。これに続いて「日系人であることで得をしたか」の問 (質問 8) については、「得をしたことがある」が 10 人、「ない」が 3 人であった。この記述回答では、「ある」と答えた人、「ない」と答えた人、ほぼすべての人に共通した回答は、日本人あるいは日系人は物事に対して誠実で真面目なので、他のアルゼンチンの人々から「信頼」、「信用」され認められているということであった。子供たちの職探しでも、日系人であることで早く職が決まるとか、日系人であることで信用されるというような回答があった。逆に「損をしたことがありますか」の問 (質問 9) には、

全員「ない」という回答であった。これらの回答結果からアルゼンチンにおいて日本人・日系人に対する信頼度の高さがうかがえる。

「日本とのかかわりを意識することがありますか」の問（質問 10）には 13 人全員が「ある」という回答で、記述回答は多岐にわたっていた。回答者本人との関わり合いにおいて、「JICA の研修で日本に行ったとか子供が日本の大学に進学した」、「子供が日本での研修・ホームステイのプログラムに応募している」、「日本に昔の友達がいる」、「そのような日本の友達と連絡を取る」、「スペイン語が理解できないそのようなとき」、「自分に日本人の血が流れていること」、「ゲートボールなどでプエノスアイレスに行って南米大会に参加するとき」、「NHK の国際放送をみるとき」などの回答があり、このほか「日本の国が健全であれば、当地の人の温かみをいっそう感じる」とか「当地の知識人は日本を良く知っているので、日本について無知ではいられない」という回答もあった。調査対象者はさまざまな形で日本との関わりを意識していることがわかる。

質問 11 から質問 13 までがコミュニティとの関わり合いの質問である。現在のコミュニティとしては、たんにガルアペー入植者とその子弟間のコミュニティではなく、それらの人々を含めた日系人の全体のコミュニティとしてのガルアペー日本人会がある。コミュニティとしての行事は全員しているという回答で、記述回答では、新年会（1 月）、敬老会（5 月）、運動会（10 月）を行っているということであった。コミュニティとして積極的にしていることについては、「ある」が 7 人、「なし」6 人であった。「ある」と答えた人の記述回答は、「日本文化の伝承と普及、日本語学校」、「日本からの大学生のホームステイの受け入れ」とか「ゲートボールのために高齢者や未亡人を車で乗せて連れて行く」、「ゲートボールをしている」、「婦人部で旅行をしたり、バザーの利益で敬老会をする」などがあった。連帯感については「大変ある」、「ある」という回答が 10 名で、「あまりない」が 2 名であった。以上から、ガルアペー入植地、プエルトリコの日本人・日系人の拠り所としてガルアペー日本人会があり、この日本人会を中心に日系人コミュニティは維持されていると判断される。

質問 14 から質問 17 が身の回りの状況、施設等に関するものである。質問 14 のガルアペー入植地の住みやすさに関しては、

写真 2 プエルトリコの町の州花ラパッチョの花



出典：筆者による撮影

「大変住みやすい」、「だいたい住みやすい」が10名、「住みにくい」が3名であった。「住みにくい」との回答は現在すでに町に移り住んでいる人からのものである。理由としては、入植地での出入りには4輪駆動車でないと移動が難しい点や交通の便が良くない点、子供の学校教育での不便などが挙げられている。反対にガルアペー移住地が「住みやすい」の回答では、現在入植地在住のうち3人が自然環境に恵まれていることと、空気や水が良いという意見で、他を気にすることなくのんびりできるという回答があった。別の視点からは「ミシオーネス州は多民族社会で人種差別もなく信頼関係を築くと同等の付き合いができる」といった意見もあった。

質問15の入植地および周辺地域での公共施設が20年前と比較して充実したかという質問には、「充実した」、「充実してきている」という肯定的な回答は6人、「まだ不十分である」、「悪くなってきた」という否定的な回答は8人であった。回答が肯定的意見と否定的意見に分かれるのは、回答者が入植地をみて答えるのか、それとも入植地を含めて周りのプエルトリコの町などをみるのかによって異なる。回答者が入植地を見て答えている場合、かつて最盛期には80世帯が入植地で暮らしていたのが、世帯の流出とともに入植地にあった学校、警察、診療所などの公共施設が閉鎖されたことで否定的な回答につながっている。逆に周りのプエルトリコの町などをみて答えている人は、学校、病院（ガンの専門病院、救急医療）などの施設が充実してきたことで肯定的な回答につながっている。

質問16の他の町に行くのに交通の便は以前と比べて改善されたかの点については、「かなり改善された」、「改善されて良くなっている」という肯定的な回答は11人である。その理由としてバス、長距離バスの本数が増加したことや州都ボサダスまでの時間が短縮されたことが挙げられ、別の理由として世帯内で自らの自転車を持つとか、あるいは自動車を持っているということによって必要なときに町に行けるようになったことを挙げて肯定的な回答となっている。他方で公共交通機関に頼らざるを得ない人の場合、「改善にはまだまだである」という意見があり、確かにバスの本数は増えて利便性は良くなっては来ているが、入植地に出かけて入植地から夕方帰るような場合、バスの本数が少なくなって長く待たなければならなくなるということであった。「改善には程遠い」の意見では、たとえ車を持っていても入植地内では雨が降ったらぬかるんで車での移動が困難になるということであった。

質問17の生活の場としてガルアペー入植地に住み続けたいかの質問には、「そう思う」、「少し思う」が5人で、「あまり思わない」、「ほかに移りたい」が7名であった。現在、ガルアペー入植地在住者の場合、「住み続けたいと思う」人が3名で、「思わない」、「他に移りたい」人が3名で意見が2つに分かれる。一方で入植地の自然、その土地の土壌の豊かさや立地条件を生

かすことによる入植地の無限の可能性に注目する人は肯定的な意見をもち、他方で日常生活をする上での不便さ、人が入植地から町へ引っ越していきだんだん入植地の世帯数が少なくなる
ことのために否定的な回答にもつながっている。現在、入植地以外に居住している人は、ガル
アペー入植地に住むことについては「あまり思わない」の意見が大部分であった。理由として
は先にあげたような入植地内の道路事情、子供の教育と子供の送り迎えのほか、インターネッ
トが使えないなどが挙げられていた。

アンケートの第1パートの終わりの質問
18は、「現在、一番望むものは何ですか」
に対しては、さまざまな意見が寄せられた
が、その中で多かったのがガルアペー入植
地の道路の改善の要望である。理由は雨が
降ると道路がぬかるんで車の運転が難しく
なるためである。今回の調査でも雨の降っ
た後に聞き取り調査をしたが、調査のため
に車を入植地の中で運転してもらったとき
も、車はスリップしながらの走行であり、
もし雨が何日も続くようだったらおそらく

写真3 雨後のガルアペー移住地



出典：筆者による撮影

車の運転は確かに難しいであろうと思われた。入植地内の主な道路については役場が石をいれ
たりして整備しているということだったけれど、さらなる改善が求められるようだ。この質問
18に関する他の意見としては、日系2世から4世の人には子供たちに日本の良い習慣を守り
続けてほしいとか、通信手段（とくにインターネット）の確保などの意見が挙げられていた。

第4節 ガルアペー入植地に関するアンケート結果パート2

本節はパート2として農業経営に関わる質問（質問19から質問44）を扱い、入植者世代か
ら調査対象本人への継承に関連した質問と現在の農業経営の状況に関わる質問に対する回答結
果をみる。

4-1 入植世代から調査対象者への継承と展望

質問19から質問24は、入植者第1世代から調査対象者への継承、今後の展望に関する質問
である。質問19では入植者世代がガルアペー移住地へ入植した目的を尋ねた。入植世代の入

植目的に関する回答は、「農業開拓の志」11人、「生活安定」2人であって、入植世代の多くの人は農業開拓に夢をもって入植していることが分かる。記述コメントには、「狭いところでなくて広いところで農業をしたかった」という回答が3人であった。入植者第1世代のなかには戦前フィリピンで農園を切り開いていた人、あるいは台湾で農業開拓を行った人もあり、戦後日本での農業に満足できずに再びアルゼンチンでの農業開拓に志を向けたということである。

質問20で来亜前の日本での職業を尋ねた。回答結果は「農業(米作, 畑作)」8人、「その他」5人である。また調査対象者の1世代目(親と一緒に入植)の一人は入植当時に学生であったので「その他」の回答を示しているが、高校では農業について学んでいたことから実質的には「その他」は5人でなくて4人と見てよい。8名が「農業」という回答にはきわめて当然という内容である。「その他」の回答者では、全然農業に関係のない電力会社に勤務とか、先生を経ての銀行員、県庁職員とか紡績会社の経営者という回答があった。ガルアペー入植地では1965年4月までに84戸の入植者があった中で、マテ茶の作付け制限、タバコの価格下落、収量減少などで1970年までに約半数の入植者が脱耕している¹⁹⁾。そうした中、農業経験のなかった「その他」の職業の入植者は、強い意志を持って開拓に臨み、農業知識を得るうえで多大な努力を払いながら開拓に成功している。

質問21の来亜前の日本での職業は役立ったかということでは、「役立った」「だいたい役立った」が9人で、「あまり役立たなかった」、「全然役立たなかった」が3人である。質問20と質問21のクロス表を取ると、表4-1のようになる。農業経験者の場合に役立ったという肯定的意見が多いのは当然の結果であるが、中にはあまり役立たなかったという回答も2人あった。否定的な回答の理由としては、日本とガルアペーでは農地規模が異なることに起因して例えば農業の使い方が異なり、日本での経験がそのまま役立たなかったようである。農業以外の職業

表4-1 ガルアペーに入植する前の日本での職業は入植地で役立ったか

	役立った	大体役立った	あまり役立たなかった	全然役立たなかった	無回答
農業(米作, 畑作)	5	1	2	0	0
牧畜・酪農	0	0	0	0	0
花卉栽培	0	0	0	0	0
林業	0	0	0	0	0
その他	3	0	0	1	1
無回答	0	0	0	0	0

19) 『ガルアペー移住地10周年記念誌』(1969) pp.118-123 参照。

の入植者については、3人が「役立った」、1人が「全然役立たなかった」という回答であった。役立った理由としては、1975年の入植地の電化工事の際、日本での職業が配線工事において自らが持っている電力の知識や土木の知識が大いに役立ったことが挙げられている。

質問 22 の入植世代から調査対象者に至るまでの間に農業経営は順調に進んだかという質問には、肯定と否定の回答が半々で、「はい」は6人、「いいえ」が6人であった。「いいえ」の回答者にどのような大変なことがあったのか尋ねたところ、「金銭面（資金繰り）」3人、「農産物価格の不安定による収入の不安定」2人、「その他」1人であった。ガルアペー入植地での開拓の第一歩は、原生林を切り開き、石を取り除いて畑を作ることであった。開拓においては原生林を切り開いて農地を作ることには力を注げば農地は拡大するが、その期間は生活のための現金収入を手にするのは難しく、逆に現金収入のために短期作物の栽培に力を注ぐと農地を切り開くことが進まず将来の安定的な収入が見込めないという二律背反的な部分がある。そのことで農業経営の推移に関する質問で否定的な回答の要因として「金銭面（資金繰り）」が挙げたのは当然のことかもしれない。「その他」の回答としてアルゼンチンにおいて初めて温州ミカン（興津ミカン）栽培に成功した一方、その産地形成、栽培技術、販路開拓において大変さがあったという回答が示された。現在、アルゼンチンの温州ミカンはアルゼンチン国内のみならず、ヨーロッパにも輸出されている。温州ミカンの栽培を初めてアルゼンチンに根付かせ普及させたという自負が、ガルアペー入植者、およびその後継者に受け継がれている。

質問 23 が農業経営で作物、経営の方法で大きな転機があったのかについては、12人が「転機があった」、1人が「ない」という回答であった。「転機があった」の回答の多くは、作付け作物の種類の変化である。アブラギリの価格の下落、ミカンの病気、気候変動などによって植え付ける作物が、アブラギリやタバコからミカンそして植林へ変化してきた。現在では主として政府からの奨励金もあることからパラナ松、エリオット松などの植林が盛んになされている。植林のほかに農作物としてミカン、生姜、花卉、マテ茶、マンジョカなどの栽培が行われている。

質問 24 の開墾地面積と未開墾地面積については、無回答1人を除いて12戸の平均開墾面積は81.3ha

写真 4 松の植林の間のマンジョカ収穫



出典：筆者による撮影

であり、平均未開墾面積については、わからないが1人と無回答者の1人を除いて32.8haであった。開墾地比率については、わからない1人と無回答者の1人を除いた11戸についての開墾地割合は72.2%、未開墾地割合は27.8%であった。1985年の「移住地農家経営調査地区統計表」の数値では、開墾地割合と未開墾地割合はそれぞれ約42.6%と57.4%であったので、開墾はさらにつづけられて進んできたものと考えられる。各戸の所有地面積に大きなばらつきがあり、さらに各農家の間での開墾の割合にも大きなばらつきがあるので、ここにあげた平均値は必ずしもガルアペー入植地農家の平均像を表すものではない。

未開墾地がまだ残っている理由については3つの理由が挙げられている。回答数が最も多かった第1の理由(5人の回答)は地形上、地質上の問題のため耕作に適していないことである。これは土地が急な斜面であったりや石があるために機械を入れることができないため、未開墾のままになっているケースである。次いで2番目に多い理由(4人の回答)としては政府による規制である。現在、原始林を伐採して開墾するには政府の許可がなければ開墾できない。インタビューした中には昨年(2011年)の11月ごろ政府に原生林の伐採許可申請をしたけれども、まだ許可が下りないという事例があった。また、川や水辺の近くでは法律的に開墾が規制されているという回答もあった。第3の理由(1人の回答)としては新たに開墾することに手が回らないという回答であった。

質問25では重複回答のもとで農業経営のなかで一番変化したことを尋ねた。回答結果は「作物種類の変更」6人、「機械化」9人、「その他」1人であった。「作物種類の変更」は質問23の記述回答からある程度予想された結果である。一番変化したこととして「機械化」の回答が最も多い。ガルアペーへの入植に際しては農業開拓地として1戸につき30haが分譲されている。これに対して1965年当時の日本では1戸あたりの平均耕作地面積は1.1ha²⁰⁾であった。入植地の1戸当たりの面積は、当時の日本の平均耕作地と比較して農地規模において格段の差があり、ガルアペーでの開拓や農作業において機械の導入が必須であったことが容易に窺われる。「その他」の1人は重複回答で「作物種類の変更」とともに「その他」を選択している。作物の変更など変化した面もあるけれども、それほど変化していないという側面もあるという意味で「その他」の回答を選んでいる。

質問26では、ガルアペー移住地は開拓・開墾の時代が終わって新たな時代に入ったのかを尋ねている。「新たな飛躍の時代になった」は7人、「だいたい終わった」は4人である。この

20) 農林水産省『平成19年度 食料・農業・農村白書』のp.5の1965年の耕地面積と総農家数により算出した。

数値を見る限りガルアペー入植地では開拓・開墾の時代が終わって新たな時代に入ったと考えてよい。しかしながら、「まだ開拓・開墾の時代は続いている」と答えた1人は、「移住を語るなら100年の計を持って語れ」というように長い期間で判断せよということからこのような回答を寄せている。「その他」の1人は、「自らの場合を振り返るとき開拓・開墾とともに農業経営に発展があったか」というと、「どちらかといえば尻つぼみである」という回答もあった²¹⁾。

以上が入植者世代から調査対象本人への営農の継承に関連した質問への回答結果である。

4-2 入植地での現在の農業

現在の農業経営の状況に関わる内容が質問27から質問44である。質問27は農業経営の規模に関する質問である。農地面積については13戸平均84.9ha、家族従業者1.3人、常時雇用している農業労働者数2.1人、収穫期などの忙しい時期の一時的な雇用者数10.5人である。農地面積を級間隔30haで頻度を調べると、各級の頻度は2人から3人のほぼ均一な様分布している。家族の中での農業従事者数のモード(最頻値)は1人、常時雇用している農業労働者のモードは2人である。一時的な農業労働者数に関しては、およそ5人から15人の間の頻度が最も多い。したがって農地面積については回答者の間でバラツキがあるけれど、農業従事に関する平均的な像としては、家族による農業従事者は1人で、常時の農業労働者数は2人、一時的な農業労働者数は10人である。

質問28は農業を継承するうえで、農業および農業に関連した専門知識をどのようにして得たかという設問である。2つまで選択肢を選択可能という条件で、「親から学んだ」が最も多く5人、「高校」、「研修所」、「独学」がそれぞれ4人であった。「高校」の回答では、具体的な日本の農業高校名や畜産を学んだことの記述があり、「研修所」の回答では、日本での農業研修、JICAでの研修、中学時の視察、さらにINTA(アルゼンチン農業技術院)での研修の記述があった。「その他」としては、「周りの人から教えてもらった」という回答があった。回答者のすべての人が手段は異なるけれども何らかの形で農業、農業に関連した専門知識を獲得していた。

質問29では、質問28で「高校、大学、研修所」を答えた人に対して、学んだ知識が役立っているか否かを尋ねた。回答は「大変役立っている」がもっとも多く5人、「だいたい役立っている」が1人、「無回答」が2人である。記述回答としては、高校で果樹について学んだこ

21) 回答者は悲観的な回答というより、農業をマイペースで進めて農業作業のある生活を楽しんでいるという印象であった。

とが良かった、日本での農業研修が良かったとか、ブラジルの農業技術は進んでいて研修できてよかったという返答があった。他の意見では、高校は普通科だったけれども、社会通念や一般常識を身に着けることができて良かったという回答もあった。

質問 30 は、アルゼンチンで農業を続けるにはたんに農業の知識だけでいいのかを尋ねた質問で、「はい」は 1 人で、「いいえ」は 12 人であった。

「いいえ」と答えた人に対して複数回

答を許して質問したところ、「経理・簿記」の知識が必要と答えたのは 1 人、「経済的な見方」と答えたのは 8 人、「その他」は 4 名であった。「その他」と回答した人は、具体的に「世界の農業生産性に目を向けることの重要性」、「すべて（地質学、経済学、気象学など）において知らないと駄目」、「適地適作の重要性」、「現地の人と仲良くすることでいろんな情報・知識を手にすることができる」ということであった。「経済的な見方」を回答した人の中には、農作物に関連してインターネットでデータをダウンロードして土地に合うものの作付けを考えると、どのような作物が売れるのかに関心を向けることという回答があった。

質問 31 では、農業経営者の仲間との情報交換などは農業経営にとって重要かどうかを尋ねた。回答は「とても重要である」が 10 人、「だいたい重要である」が 2 人、「重要なときとそうでないときがある」が 1 人であった。さらにどのような情報について重要なのか尋ねたところ、回答は多岐に亘った。これらを類別すると、新品種や品種改良、栽培・植樹に関する農業技術に関するもの、作物の販路、価格情報、税に関するもの、情報交換による効率性を求めること（無駄を省くこと）、INTA や日系人同士のグループでの情報交換の必要性といったものに分けられる。

質問 32 は、農業団体、親睦会などからの農業経営の指導の有無を尋ねたものである。ここでの質問は調査対象者が農業経営の指導を受けているかの質問で、「ある」と答えた人は 5 人、「ない」と答えた人は 8 人であった。「ある」では INTA（アルゼンチン農業技術院）からの農業指導、例えば新技術、ミカンの技術指導やジェルバ（マテ茶の木）の栽培方法の指導という記述回答があった。現在「ない」と答えた人も、かつては JICA からの農業指導があり利用

写真 5 古庄省吾氏と背後のマテ茶の木



出典：筆者による撮影

していたとか、亜国拓殖組合からの指導やミカン販売の手助けがあったという回答が5人あった。回答者のなかには日本人・日系人だけに向けての農業指導があつて欲しいという記述もあった。

質問 33 では、政府・農業団体からの作付け指導、制限、あるいは補助金等による誘導の有無を尋ねた。「ある」と答えたのは8人、「ない」と答えたのは5人である。「ある」の具体的な内容は政府による植林や牧場への助成金、野菜などの指導であった。「ある」と答えた人の中で2人は政府からの融資はあることは知っているけれども利用していない、その理由としては申請してもなかなか融資が決まらなと回答している。「ない」との回答のなかには、以前の体験として政府の補助金を受けたら、その後土地の一部を道路のために収容されたという記述があった。

質問 34 では、ガルアペー入植地でコミュニティとして農業のことで何か積極的に活動しているかを尋ねた。「ある」と答えたのは2人、そのうち1人はかつてあったということで、実質的には「現在ある」は1名である。「ある」の具体的な内容は、「外部から農業技術員が来るときには話を聞く」であった。11人が「ない」と答えている。コメントとしてかつてはミカンを共同選果場で選別するとか、ミカン栽培技術などで積極的に活動したが、現在ではそのような活動は無いという回答だった。

次に質問 35 で農業の生産性向上のために農業機械は重要なかを質問した。回答者全員に農業機械は重要であるという回答であった。「重要である」が9人、「だいたい重要である」が4人であった。農地面積の広さを考えると自然な回答である。具体的な機械名としてはトラクターが圧倒的に多く、消毒器（スピードスプレアも含めて）、草刈り機が次いで多かった。このほか短期作物の栽培で良い作物を作るには浄水設備やスプリンクラーが必要という回答があった。

さらに質問 36 では農業の効率化において農業機械のほかに何が重要なかを質問した。この質問では複数回答のもとで「農作業の計画的編成」が2人、「作付面積と施肥の関係」が6人、「その他」が5人、「回答なし」が1人であった。「作付面積と施肥の関係」が6人であることは比較的共通して重要性があることがわかる。「その他」での重要なこととして、農業の技術的なこと、これに関連して土壌中のバクテリアと農作物の関係、発生した病害虫に対する適正な対処法の指摘があり、機械に関連してはトラクターの場合アタッチメントが必須であるとか、スプリクラ 設備、農業を管理するうえでの必要なコンピューターといったことであった。

質問 37 では農業経営において重要なことを順番に3つ挙げてもらった。最も回答が多かつ

たのは「品質の良い農産物」13人、次いで「効率的な農作業」12人、「農業経営者同士の情報交換」7人、「農産物の価格動向を知ること」6人、「その他」1人であった。すべての回答者に共通することは、なによりも「品質の良い農産物」を作ることであり、農業に携わる者の使命感としての共通認識といえよう。「その他」では生産物を一定量確保することが重要であると挙げられていた。これはたとえ良い品質の農産物を作ったとしても、一定量の生産を確保できなければ、取引してもらえないとの理由からであった。

質問38(複数回答可)では、現在の農業経営における心配事を尋ねた。最も多かったのは働き手(農業作業員)の確保に関すること、つまり「農業労働者の確保」が5人、次いで「農産物の価格変動」が4人、「後継者」と「経営規模(農地の広さ)」がそれぞれ2人、「その他」4人であった。これら選択項目に関するコメントとして「農業労働者の確保」の場合、政府による過剰な労働者保護政策により、労働者の権利が強く雇用の確保が難しいとか、農産物価格は不安定なので正規雇用者に正規賃金を支払いが難しいという指摘があった。「農産物の価格変動」では、価格が不安定なので経営が赤字にならないか心配であるとの指摘や、また柑橘の場合、国内消費の国内価格と輸出される価格が異なっていて、国内価格は安いことが指摘された。「後継者」については子供が女の子であるから今後どうなるかは未定とか、「経営規模」については最低面積の確保の必要性を考えるというコメントがあった。

心配事を選択項目として「その他」を選んだ人は、政府の政策は政権交代の度に変わって一貫性がなくそのため農業経営が難しいとか、作物栽培のデリケートさのために栽培管理に関する心配が指摘され、さらにはカンキツ類を輸出している人は為替レートの問題を指摘していた²²⁾。この為替問題が農産物の輸出に影を投げかけているようである。

質問39は、農産物輸送のための交通網の整備に関する質問である。「良く整備された」は2人、「だいたい整備された」は8人、「まだ整備は十分でない」は3人であった。「良く整備された」では、道路が良くなってその結果輸送が良くなったという指摘である。道路や一般道は整備されたのは認めるけれども、例えば荷物を発送してから予定日に相手方に荷物が届かないという問題とか、入植地内の道路はまだ舗装されておらず、入植地内の道路の整備を行うことが重要という意見、日本と比較したとき宅配便などのシステムがないなど不便な点も残るため、「だいたい整備された」という回答であった。大別すると10名は交通網が整備されたという意見で、残る3名が「まだ整備が十分でない」という意見であった。「まだ整備が十分でない」

22) 筆者がアルゼンチンに滞在した2012年8月の時点では為替レートは公式的にはおよそ1ドル=4.5ペソにもかかわらず、巷の間為替レートでは1ドル=6ペソあるいは7ペソという状況であった。

理由としてガルアペー入植地はブエノスアイレスなどの大消費地から 1,400km も離れていて、もっと時間距離をより短くするような整備が必要であるとか、入植地内をみるとダート道路のままで時間がかかるという点が挙げられている。

質問 40 では農産物の販路の点から見てガルアペーでの農業経営は適しているか尋ねている。「適している」が 3 人、「だいたい適している」が 2 人、「あまり適さない」が 6 人、「その他」が 1 人であった。回答の記述部分を見ると、大部分の回答者に共通認識としてガルアペー移住地が大消費地（ブエノスアイレス）まで遠いことがあり、その「遠い」という点に着目して答えたのが、「あまり適さない」という回答であった。逆に「適している」との回答では、木材は長距離輸送で傷むことがないので距離は関係なく、このため特にミシオーネス州は植林に適しているという回答、土壌の豊かさに注目してどのような作物も作れるという意味で適しているという回答のほか、国道が舗装されたので適しているという回答もあった。ミシオーネス州の土壌は全般的にどのような農作物の栽培も適しているという共通の認識はあるが、作物の販路や輸送の点で上記のように異なる意見が回答として示されている。

質問 41 は、農産物の出荷を共同出荷・共同配送でおこなうのかという質問である。「限られた作物についてする」が 1 人と「しない」が 12 人である。現在は共同での出荷・配送を「しない」との回答をした中で、数人はかつてミカン（興津ミカン）の共同選果、共同販売を行っていたというコメントが付けられていた。現在は基本的には販路は、個人での販売先の確保ないし仲買人による買付である。

質問 42 は、農産物の植付けや出荷タイミングを考えるうえで、農産物価格等の経済状況をチェックするか否かの質問である。「良くチェックする」3 人、「だいたいチェックする、しないときもある」3 人、「あまりチェックしないが、たまにするときもある」2 人、「全然チェックしない」5 人である。これについてのコメントは少ないが、ミカンについては価格を「良くチェックする」、「だいたいチェックする、しないときもある」で 1 人ずつあった。「良くチェックする」の回答では花卉についてするとの記述があった。「あまりチェックしないが、たまにする」と「全然チェックしない」の選択は、買い手市場なので仲買人が買ってくれないとどうにもならない、一年中同じ価格で買ってくれるといったことで価格をチェックする必要性が無いということの結果であった。

質問 43 では、現在栽培している農産物は国内向けか、それとも海外向けか尋ねたものである。これは作物によって異なる。生姜などは国内向けだが、ミカンは国内向けと海外向けがある。「すべて国内向け」が 4 人、「おもに国内向け、一部海外向け」が 2 人、「おもに海外向け、一部国内向け」が 7 人であった。海外向けミカンの輸出先としてはヨーロッパである。このよ

うにミカンの販路は各戸によって異なり、輸出向けのみ、輸出と国内向け、あるいは国内向けのみといった違いがある。松材、マテ茶、生姜、花卉などは国内向けとなっている。

最後の質問 44 は、農業全般に関する自由意見を求めたものである。10 人から回答を得ている。内容は 4 つに分けられる。その第 1 にガルアペー移住地は人が減って移住地の形態をなくしている、かつて住民は移住地のコミュニティとして組織を作りボランティアの形で農業に関連して活動していたが、現在はこれがないという意見である。

第 2 に農業に対する姿勢である。かつてミカンの木にウィルスが入りミカンの木が駄目になり、またアブラギリの値段が下がったことが入植者にガルアペーを去るきっかけを作ることになったが、新しい情報を得て試行錯誤をおこない、まじめに仕事をしていたら何が良いか見えてくるという意見である。ガルアペーは赤土の大地でどのような作物も良く育つが、なかでも土地にもっともあった作物をつくること、その具体例として木を植えることが大切であるという指摘がされている。

第 3 に農業技術と販路に関する意見である。農協は現在でほとんど機能していない。研究・栽培・販売など全部を個人で対応しなければならず、農協で農業に関する情報、視察、勉強会のようなものをして欲しいという意見、ガルアペーは消費地から遠く、経費、交通、情報などの点で不利な位置にあり、その上、現在では組織として買い手を探すのでなく個人で探している状況である、これが難しいという意見である。

第 4 に後継者に関する意見である。子供の場合、農業だけでは生活は難しいだろうから、現在の移住地の状態では子供に帰って農業を継いでほしいとは言えない、また、できたら子供に農業をしてほしいが農業は好きでないとやれないといった意見である。

第 5 節 ガルアペー入植地に関するアンケート結果パート 3

アンケートのパート 3 として示すのは、現在、各農家がどのような農作物（永年作物、短期作物、樹木）をどれだけの面積で栽培しているか、またどのような農機具を使用しているかを調査した結果である。

入植当時（1960 年ごろ）の作物としては、マテ茶、柑橘、アブラギリ、茶樹、パラナ松などの永年作物を植えて生産期に達するまでは、間作作物として短期作物のタバコ、マンジョカ、大豆などの豆類、トウモロコシ等を作付していたようである²³⁾。入植者向けの移住地での営

23) 日本海外協会連合会『アルゼンチンは招く - ミシオーネス州と日本人 -』（1960）pp.94-107 を参照。

農の進め方として、1年目には5ヘクタールの面積を開墾するとともにそこにタバコやトウモロコシ等の換金性の早い短期作物を作付し、年を経るごとに永年作物、アブラギリ、茶、植林（パナ松、ユーカリなど）を徐々に植えることを推奨していた。10年後には30ヘクタールすべてを開墾して26ヘクタールを永年作物、4ヘクタールを短期作物という姿が描かれていた。

入植当時にはアブラギリも盛んに栽培されていたようだが、かつて生産過剰や桐油価格の下落を経験しているために、現在は栽培されていない。ミシオーネス州の他地域では茶が生産されているが、ガルアペー入植地では茶（紅茶）も栽培されていない。

表 5-1 栽培農家戸数、作付面積総数、年間収量総数

主要作物	栽培農家 (戸数)	主要作物 (戸数)	作付面積総数 (ha)	年間収量総数 (t)
柑橘	12	11	166	2305 (8 戸の収量)
マテ茶	8	4	89	421 (6 戸の収量)
パナ松	11	5	253	
エリオット 松	11	3	258	
ユーカリ	4	2	32.5	

(主要作物の項目は、調査対象の農家自身が主要作物として考えている作物である)

今回の調査で明らかになったことは、

1. 入植当時作付けされていた作物のなかには、現在おもな作物として作付けされていないものがある。アブラギリ、茶樹、タバコ、大豆などの豆類がそれである。栽培されない理由としては栽培に手間がかかるとか、価格が下落しているという理由のためである。
2. 表 5-1 から読み取れるように、現在は 13 戸の農家はおもに永年作物を栽培し、短期作物は一部の農家を除き副産物として栽培する程度である。永年作物としては柑橘、マテ茶と木樹（パナ松、エリオット松、ユーカリなど）が主要作物として作付けされている。

調査対象の農家 13 戸のなかで大部分の農家が作付している永年作物は、柑橘、マテ茶、パナ松、エリオット松である。柑橘については栽培農家 12 戸のうち 11 戸が主要作物と考えている。12 戸の作付面積の総数は 166 ヘクタールで、年間収量の総数は 8 戸で 2,305 トンである。その 8 戸の平均収量は 13.9t/ha である。

次にマテ茶の栽培農家は 8 戸のうち 4 戸が主要作物と考えている。収穫量について回答のあった 6 戸の作付面積総数は 89 ヘクタールで年間収量総数は 421 トンである。6 戸の平均収量は

4.7t/ha である。このほか一部の農家が桃、ブドウ、クリ、カキの栽培を試みている。

植林の樹木に関してパラナ松が 11 戸によって植樹され、そのうち 5 戸が主要作物として考えている。その植樹総面積は 253 ヘクタールである。エリオット松は 11 戸によって植樹され、うち 3 戸が主要作物と考えている。植樹総面積は 258 ヘクタールである。このほか一部の農家でユーカリ、桐、ヒノキ、ケヤキの栽培が試みられている。

短期作物については一戸の農家がピーマン、別の農家が生姜を主要作物として栽培している。

次に農機具の導入に関する調査結果は、表 5-2 の通りである。トラクター、トラック・ジープ、チェンソー、トレーラー（アタッチメント）、草刈り機、ハローなどがほとんどの農家に導入されていた。チェンソーが 21 台であった。これは原生林を切り開いて新たに開墾するための必需品であり、いまなお雑木を切ったりするのに必要で当然の結果と考えられる。選別機については、かつてミカンの共同選別・共同出荷していた時代には必要だったが、現在は個別に対応しているので必要ないということである。回答としては 1 台であるが、この 1 台も現在は使用されていない。

表 5-2 現在の農機具

大農機具・車両 (使用台数)	合計 (台)
トラック・ジープ	14
トラクター	20
ハロー (アラード)	12
チェンソー	21
選別機類	1
ブラウ (ディスコ)	9
草刈り機	16
動力噴霧器	12
トレーラー (アタッチメント)	20.5
スピード・スプレア (自動噴霧器)	6

第 6 節 アンケート調査結果から見えるガルアペー入植地

第 3 節から第 5 節でアンケート調査結果を示した。本節ではこれらの結果からガルアペー入植地がどのような状況なのかをまとめる。

はじめに第 3 節のアンケート調査のパート 1 の結果をまとめる。

1. 世帯で見たとき、農業後継者がいる世帯と後継者が未定である世帯、とくに第 1 世代目と第 1 世代で親と一緒に入植した世代では、後継者がいる前者の場合に世帯規模が大きく 4～5 人以上であり、後者の後継者未定の場合には夫婦 2 人である。2 世代の世帯ではおもに夫婦と子供からなっている。
2. 日本人あるいは日系人としては、アルゼンチンの人々から日系人は誠実さ・真面目さから信頼・信用されているという点に誇りがある。
3. 日系人社会としてのコミュニティとしての繋がりはガルアペー日本人会にあり、ここを中心に年中行事や日本文化や習慣の伝承に努めている。

4. ガルアペー移住地を総合的に判断したとき、生活の場としての居住地がガルアペー入植地なのかそれ以外のプエルトリコなどの町になるのかが決まる。ガルアペー移住地は土壌豊かないろいろな作物が採れる場所であり、自然環境の豊かなところである。この点はアンケート対象者全員に共通している。けれども、入植地内の道路は舗装されておらず、雨が降ったらぬかるみ自動車で移動が困難になる。また子供がいる家庭では、子供が学童期に入ったら、勉強のことの心配や学校への送り迎えが大変になるなどの不便もある。また、居住世帯が少なくなって入植地では治安面で不安が残る。こうした入植地のプラスの側面、マイナスの側面を総合的に考慮したとき、入植地にとどまるのか、それとも町に移り住むのかが決まるようである。

第4節の農業経営に関わる質問（質問19から質問44）については、4-1の入植者世代から調査対象本人への継承に関連した質問についてまとめると、次のようになる。

5. 現在、ガルアペーに農地を所有して農業を営んでいる人の親世代（入植世代）は、農地開拓に大きな夢を抱いて入植していた。親世代がポジティブな意志を持って入植したからこそ、入植地の農業経営が次の世代に確かなものとして受け継がれてきたといえる。こうした開拓が成功した入植世代の3分の2の人について、アルゼンチンに来る前の職業が農業であったことが、開拓での成功に結び付いたとみて良い。けれどもアルゼンチンに来る前の職業が農業以外の人も役立ったという回答も寄せられていて、来亜前の職業経験が入植地の形成（入植地の電化工事）において発揮されている。
6. 農業経営に関しては、開拓開始からこれまでの間に順調に進んだ世帯と必ずしもそうでなかった世帯に分かれる。必ずしも順調でなかった世帯では問題として金銭面での資金繰りが挙げられている。農業開拓においては開拓に力を入れると収入が得られず、逆に農作業に力をいれると、農地拡大が進まないという二律背反の側面があるから、資金繰りに苦労したことが挙げられていると推察される。
7. 農業経営で一番変化したことについては、「機械化」や「作物の種類の変更」であった。機械化については、農地面積が日本の平均的面積よりはるかに大きいので、効率的な作業のためには必要であったことがよく理解される。農作物の変更では、アブラギリのように時代の変遷とともに価格が下落してしまったものや、ウィルスなどの病気や天候不順で作物を変更せざるを得なかったなどがそのおもな理由とされる。第5節の結果から現在は調査対象の13戸の農家はおもに永年作物を栽培し、短期作物は一部の農家を除き副産物として栽培する程度である。永年作物としては柑橘、マテ茶と木材（パラナ松、エリオット

松、ユーカリなど) が主要作物として作付けされている。

8. 入植地開拓が終わって新しい時代に入ったかどうかについては、大部分の人がそう考えている。筆者自身、入植地を見たところ印象として確かにそのような判断ができると思った。しかし、このガルアペー入植地は計画入植地だったので、計画という側面からみると、入植地開拓が終わって新しい時代に入ったかどうかについての判断をするにはまだ早すぎるという意見もあった。

4-2 の現在の農業経営の状況に関わる質問への回答は、次のようにまとめられる。

9. 所有農地面積については、各戸の間でバラツキが大きくその平均値は全戸数を代表する値を表すものでないが、農業の経営形態については共通したものがある。それは家族従業者が1または2人で、このほかに常用雇用として農業労働者2人あり、農繁期などに一時的に多くの農作業員を雇用するというものである。
10. 農業に関する専門知識は、高校や研修所、親から学ぶとか独学によるものであった。そうして得た知識は農業に役立っていた。さらにアルゼンチンで農業を続けていくうえで農業以外に必要なものとしては3分の2の人が「経済的な見方」が必要と答えていた。

農業経営者仲間との情報交換は農業経営にとってほぼ全員が重要であると考えている。作物に関する新品種とか品種改良、栽培に関する情報や、作物の販路や価格情報、さらには税に関するものなど、本人が知らない新しい情報を手に入れることができるとして重要視されている。

11. 農業経営の指導や誘導に関して農業団体から指導を受けた経験があるという人が約3分の2で、JICA や INTA (アルゼンチン農業技術院) からの農業指導を受けていた。現在、JICA からの農業指導はないが、なかには日本からのそうした指導が欲しいという意見もあった。

政府からの作付け指導や、助成金による誘導については、これまで何らかの形で農業経営の指導や助成金を受けた経験があり、その割合は全体の約3分の2人が受けていた。

12. 農業の生産性向上のためには、「機械化」がもっとも重要で、ついで「作物の作付け面積と施肥の関係」をよく知ることが重要であることが挙げられている。4-1 でも指摘したように、広大な農地を切り開くための「機械化」は重要であるばかりでなく、農作業の効率化とその作物収量の増大においても重要である。

農業経営において重要なことは、最も多い順にみると、農業そのものにかかわること、具体的には「品質の良い農産物を作ること」、「効率的な農作業」を行うことについてほぼ

全員の人が指摘している。約半数の意見として「経営者同士の情報交換」と「農作物の価格動向を知ること」が重要であると指摘されている。

13. 道路および道路交通網の整備に関しては、入植地の道路整備はまだ不十分であるが、町や州都を結ぶ国道は整備されてきたというのが大方の見方である。道路交通網としてはガルアペーがブエノスアイレスなどの消費地から遠いこともあり、出荷した作物が期日通りに届かないなどの問題もあり、その改善が求められている。
14. 作物の配送に関して、かつてはミカンの共同で作物の選別や共同での配送を行っていたが、入植地での農業経営人数が減ったために現在は個人で対応している。作物の販路から見たときのガルアペーは消費地に遠いことから、作物の生産に不利であるという意見が多かった。しかしながら、木材の場合、ミカンなどの作物と異なり、移動によって傷むことがないので関係ないという意見もあった。
15. 農作物の作付け時期や出荷タイミングにおいて農産物の価格状況をみて判断するのかについては、半数の人が良くチェックするとか大体チェックしていて、残り半数近くの方はチェックしていなかった。チェックしない理由は、仲買人が買値を決める買い手市場なので、どうにもならないという意見であった。
16. 作物によって国内向けになるのか、海外向けになるのかが異なる。花卉や生姜はすべて国内向けであるが、ミカンなどの作物の出荷は大きく3つに分けられる。ひとつが国内向けであり、もう一つが国内向けと海外向けである。第3番目が海外向けだけである。
17. ガルアペー移住地の農業全般に関する自由意見はおおきく4つに分類される。第1は農業におけるコミュニティ組織（みかんの共同選果、共同発送など）が維持できなくなって、現在は無いことである。第2に現在もガルアペーで農業に携わっている人は農業に対してポジティブな姿勢で臨んでいることである。すなわち、挫折するような大きなことがあってもこれを克服しようとする姿勢があり、また新しい情報を得て試行錯誤を重ねながら新たな農業の前進を試みていることである。第3に農業技術の習得、販路の開拓は、現在おもに個人で対応しなければならないことである。これを組織立てて進めてほしいという意見がある。第4に後継者に関する意見で、農業を子どもが継いでくれるのかどうか、今後のことが気になるということであった。

第7節 結び

2012年はガルアペー入植開始年から数えて53年目である。私が『アルゼンチンは招く - ミ

シオーネス州と日本人 -』に巡り合ったことを契機に、半世紀後のガルアペーがどのような姿なのかに関心を持ち、ガルアペーでのアンケートの聞き取り調査をおこなった²⁴⁾。その調査結果が第3節から第5節の内容で、それをまとめたのが第6節である。

かつては各々の入植者は個別に農業開拓を進めるなかで、協同的あるいは互助的な精神のもとで配電工事など公共インフラの整備を行うとともに、農産物とくにミカンの共同選果や共同配送をおこなうなど、「農業開拓」を軸にガルアペーのコミュニティが形成されていた。50年経た現在、入植戸数の減少の結果、ミカンの共同選果や共同配送はなくなり、農業・農作業において世帯ごとに個別的な対応が求められる時代になっている。各世帯は協同で開拓を進めた、あるいは進めざるを得なかった時代から、入植地での農業従事戸数の減少に伴い、個別に対応せざるを得ない時代になっている。

現在の入植地農家は、入植地を去った世帯からの農地買い増しによって農地面積を当初の30haの農地から大きく拡大させている。個々の農家は作物についてもたんにパラナ松などの植林やミカン栽培だけでなく、生姜作りや花卉栽培など、創意工夫を重ねながら農業に携わっている。他方で世帯が抱える後継者問題、作物の共同での配送などの悩みや願望もあった。いまや各農家は個別に対応する、ある意味で「普通の農家」であった。

同時にガルアペーの日本人・日系人コミュニティは「農業開拓」から「日本人、日系人」に軸足が移り、ガルアペー日本人会のもとでアクティビティ活動や行事が展開されている。会長の在原繁氏を囲んでの座談会²⁵⁾では、これからの農業のあるべき姿や農業継承のことなどが語られたが、「日系人」として日本の文化・伝統をいかに次世代に伝承していくかが今後の課題としてあるようであった。

今後に残された研究課題としては、クロス集計を通して農業の実態をより明らかにすることである。今回はごく一部についてはクロス集計をしたが、農業の部分では行わなかった。たとえば耕地面積規模と作物収穫量の関係などをクロス集計による分析から現在のガルアペー移住地農業をより詳細に知ることができるであろう。

また、今回触れなかったミシオーネス州の農業あるいはアルゼンチン全体の農牧業との比較考察である。ミシオーネス州の農業を調べることでガルアペーの農業経営がどのような特徴が

24) ガルアペーでの調査に当たってはブエノスアイレス経由でミシオーネス州に入った。経由地のブエノスアイレスでは、前在亜熊本県人会長の古庄鏑次郎氏、日亜文化財団相談役でありかつ現在、在亜熊本県人会長の阪田マリオ氏、日亜文化財団理事会長補佐の加賀美オラシオ氏、日亜文化財団事務局長の宮城マリアナ氏には歓迎していただくとともに、アルゼンチンでの日本文化の伝承と、日本庭園を通してアルゼンチン社会への日本文化の紹介など興味深い話を語って頂いた。

25) 古庄省吾氏の配慮で、調査期間中の2012年8月16日に座談会が開かれた。

あるのか、またアルゼンチン農牧業の中でどのような状況なのかを分析することで、ガルアペー移住地農業をより良く理解することができると思われる。

参 考 文 献

1. Borjas, G.J., "Self-Selection and the Earnings of Immigrants," the *American Economic Review* vol.77, no.4, 1987.
2. Ministerio de Economía y Finanzas Públicas, "Provincia de misiones," 2010.
3. アケミ・キクムラ=ヤノ編 『アメリカ大陸日系人百科事典』明石書店, 2002 年.
4. アルゼンチン日本人移民史編纂委員会 『アルゼンチン日本人移民史第 2 巻戦後編』2006 年.
5. 外務省領事移住部 『わが国民の海外発展 - 移住百年の歩み (本編) - 』1971 年 1 月.
6. ガルアペー移住地入植十周年記念行事委員会 『ガルアペー移住地 10 周年記念誌』泰生社, 1969 年 10 月.
7. 国本伊代 『ボリビア国サンファン移住地 - 実態と意識調査による日本人村の素描』『移住研究』21 号, 1984 年, pp12-28.
8. 国際協力事業団 『移住地概要 昭和 50 年版』1975 年.
9. 国際協力事業団 『移住地概要 昭和 58 年版』1983 年.
10. 国際協力事業団 『移住地概要 平成 3 年版』1991 年.
11. 国際協力事業団 『移住地概要 平成 10 年版』1998 年.
12. 国際協力事業団 『移住事業国別調査報告書 (アルゼンティン)』1992 年.
13. 国際協力事業団 『移住地農家経済調査報告 昭和 51 年版』1976 年.
14. 国際協力事業団 『移住地農家経済調査報告 昭和 55 年版』1980 年.
15. 国際協力事業団 『移住地農家経済調査報告 昭和 60 年版』1985 年.
16. 国際協力事業団 『移住地農家経営調査地区統計表』1985 年.
17. 財団法人日本海外協会連合会 『アルゼンチンは招く - ミシオーネス州と日本人 - 』1960 年 8 月.
18. 日本人アルゼンティン移住史編纂委員会 『日本人アルゼンティン移住史』1971 年.
19. 農林水産省 『平成 19 年度食料・農業・農村白書』2008 年.

アルゼンチン共和国ガルアペー計画入植地に関する調査報告

付属資料 1: アンケート調査結果

質問 24 の開墾面積と未開墾面積については本文中で平均値を記述した。質問 5 は記述回答であり、本文中でも触れているので省略した。また、質問 18 と質問 44 は自由記述のため表示を省略した。

質問 1 入植した世代 (1 世代目) から数えて何世代目か

調査対象者の世代	人数	割合
1 世代目	3	23.1 %
1 世代目 (親と一緒に入植)	6	46.2 %
2 世代目	4	30.8 %
3 世代目	0	0.0 %
無回答	0	0.0 %
全体	13	100.0 %

質問 2 現在の年齢

現在の年齢	人数	割合
30 歳代	1	7.7 %
40 歳代	2	15.4 %
50 歳代	1	7.7 %
60 歳代	6	46.2 %
70 歳代	2	15.4 %
80 歳以上	1	7.7 %
無回答	0	0.0 %
合計	13	100.1 %

質問 3 あなたの職業

現在の職業	人数	割合
農業	10	76.9 %
その他	3	23.1 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

質問 4 家族人数

家族規模 (人数)	人数	割合
1 人	1	7.7 %
2 人	5	38.5 %
3 人	2	15.4 %
4 人	0	0.0 %
5 人	3	23.1 %
6 人以上	2	15.4 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.1 %

質問 5 世帯構成 (省略)

質問 6 現在の居住地

居住地	人数	割合
ガルアペー入植地	6	46.2 %
ブエルトリコ	6	46.2 %
アルカサル	1	7.7 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.1 %

質問 7 日系人であることに関する意識

日系人であることの意識	人数	割合
強く意識している	8	61.5 %
少し意識している	4	30.8 %
あまり意識していない	1	7.7 %
全然意識していない	0	0.0 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

質問 8 日系人であることで得をしたことがあるか

	人数	割合
ある	10	76.9 %
ない	3	23.1 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

質問 9 日系人であることで損をしたことがあるか

	人数	割合
ある	0	0.0 %
なし	13	100.0 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

質問 10 日本とのかかわりを意識することがあるか

	人数	割合
ある	13	100.0 %
なし	0	0.0 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

アルゼンチン共和国ガルアペー計画入植地に関する調査報告

質問 11 入植地でのコミュニティとしての行事をしているか

	人数	割合
はい	13	100.0 %
いいえ	0	0.0 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

質問 12 コミュニティとして積極的にしていることがあるか

	人数	割合
ある	7	53.8 %
なし	6	46.2 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

質問 13 コミュニティとしての連帯感があるか

	人数	割合
大変ある	2	15.4 %
ある	8	61.5 %
あまりない	2	15.4 %
全くない	0	0.0 %
無回答	1	7.7 %
[人数]	13	100.0 %

質問 14 ガルアペー入植地の住みやすさ

	人数	割合
大変住みやすい	8	61.5 %
だいたい住みやすい	2	15.4 %
住みにくい	3	23.1 %
その他	0	0.0 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

質問 15 入植地および周辺で公共施設は20年前と比較して充実したか[2つまで]

	人数	割合
充実した	3	23.1 %
充実してきている	3	23.1 %
まだ不十分である	7	53.8 %
悪くなってきた	1	7.7 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	107.7 %

質問 16 他の町に行く交通の便は以前と比べて改善されたか

	人数	割合
かなり改善された	8	61.5 %
徐々に改善されて良くなっている	3	23.1 %
まだまだである	1	7.7 %
改善には程遠い	1	7.7 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

質問 17 生活の場としてガルアペーに住み続けたいか

	人数	割合
そう思う	4	30.8 %
少し思う	1	7.7 %
あまり思わない	5	38.5 %
いいところがあれば他に移りたい	2	15.4 %
無回答	1	7.7 %
	13	100.1 %

質問 18 現在、一番望むもの（自由回答のため省略）

質問 19 入植世代の来亜の目的

	人数	割合
農業開拓の志	10	76.9 %
生活安定のため	2	15.4 %
農業研修生として	0	0.0 %
技術者として	0	0.0 %
その他	1	7.7 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

質問 20 来亜まえの日本での職業 [2 つまで]

	人数	割合
農業 (米作, 畑作)	8	61.5 %
牧畜・酪農	0	0.0 %
花卉栽培	0	0.0 %
林業	0	0.0 %
その他	5	38.5 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

アルゼンチン共和国ガルアペー計画入植地に関する調査報告

質問 21 日本での職業はガルアペーでの開拓・農業に役立ったか

	人数	割合
役立った	8	61.5 %
大体役立った	1	7.7 %
あまり役立たなかった	2	15.4 %
全然役立たなかった	1	7.7 %
無回答	1	7.7 %
[人数]	13	100.0 %

質問 22 入植世代からあなたにいたるまで農業経営は順調に進んだか

	人数	割合
はい	6	46.2 %
いいえ	6	46.2 %
まあまあ	1	7.7 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.1 %

質問 22-1 「いいえ」と答えた方、どのような大変なことがあったか[3つまで]

	人数	割合
金銭面(資金繰り)	3	50.0 %
農産物価格の不安定による収入の不安定	2	33.3 %
天候不順などによる農作物の不作	0	0.0 %
新しい試みでの失敗	0	0.0 %
その他	1	16.7 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	6	100.0 %

質問 23 農業経営において作物・経営方法などで大きな転機があったか

	人数	割合
転機があった	12	92.3 %
ない	1	7.7 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

質問 24 開墾地面積と未開墾地面積については、本文中に平均開墾地面積、平均未開墾地面積等を記述しているので数値記入と未開墾地の理由の記述を省略した。

質問 25 これまでの農業経営の中で一番変化したこと [2 つまで]

	人数	割合
作物種類の変更	6	46.2 %
機械化	9	69.2 %
農業全般	0	0.0 %
その他	1	7.7 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	123.1 %

質問 26 開拓・開墾の時代は終わって、新たな飛躍の時代になったのか

	人数	割合
新たな飛躍の時代になった	7	53.8 %
だいたい終わった	4	30.8 %
まだ開拓・開墾の時代は続いている	1	7.7 %
その他	1	7.7 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

質問 27 現在の農地規模

	人数	割合
0ha 以上 30ha 未満	2	15.4 %
30ha 以上 60ha 未満	2	15.4 %
60ha 以上 90ha 未満	3	23.1 %
90ha 以上 120ha 未満	3	23.1 %
120ha 以上	3	23.1 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.1 %

質問 27-1 家族内での農業従事者数

	人数	割合
1 人～2 人未満	8	61.5 %
2 人～3 人未満	3	23.1 %
3 人～4 人未満	2	15.4 %
4 人～5 人未満	0	0.0 %
5 人以上	0	0.0 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

アルゼンチン共和国ガルアペー計画入植地に関する調査報告

質問 27-2 常時、雇用している農業労働者

	人数	割合
1 人	1	7.7 %
2 人	5	38.5 %
3 人	3	23.1 %
4 人	0	0.0 %
5 人以上	1	7.7 %
無回答	3	23.1 %
[人数]	13	100.1 %

質問 27-3 一時的 (収穫時など) な農業労働者

	人数	割合
5 人未満	0	0.0 %
5 人以上 10 人未満	5	38.5 %
10 人以上 15 人未満	6	46.2 %
15 人以上 20 人未満	1	7.7 %
20 人以上	1	7.7 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.1 %

質問 28 農業および農業に関連した知識をどのようにして得たか [2 つまで]

	人数	割合
高校	4	30.8 %
大学	0	0.0 %
研修所	4	30.8 %
独学	4	30.8 %
親から学んだ	5	38.5 %
その他	2	15.4 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	146.3 %

質問 29 28 で高校・大学・研修所を選んだ人について、学んだ知識は役立っているか

	人数	割合
大変役立っている	5	62.5 %
大体役立っている	1	12.5 %
少しは役立っている	0	0.0 %
役立っていない	0	0.0 %
無回答	2	25.0 %
[人数]	8	100.0 %

質問 30 アルゼンチンで農業を続けるにはたんに農業の知識だけでよいのか

	人数	割合
はい	1	7.7 %
いいえ	12	92.3 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

質問 30-1 「いいえ」と答えた人, どのような知識が必要か [2 つまで]

	人数	割合
経理・簿記	1	8.3 %
経済的な見方	8	66.7 %
その他	4	33.3 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	12	108.3 %

質問 31 農業経営者との情報交換は, 農業経営にとって重要か

	人数	割合
とても重要である	10	76.9 %
だいたい重要である	2	15.4 %
重要な時とそうでないときがある	1	7.7 %
あまり重要でない	0	0.0 %
全然重要でない	0	0.0 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

質問 32 農業団体, 親睦会からの農業経営の指導などの有無

	人数	割合
ある	5	38.5 %
ない	8	61.5 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

質問 33 政府・農業団体などからの作付指導や制限, 補助金による誘導の有無

	人数	割合
ある	8	61.5 %
ない	5	38.5 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

アルゼンチン共和国ガルアペー計画入植地に関する調査報告

質問 34 コミュニティとして農業のことで積極的な活動をしているか

	人数	割合
ある	2	15.4 %
ない	11	84.6 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

質問 35 農業機械は農業生産性向上のために重要か

	人数	割合
重要である	9	69.2 %
だいたい重要	4	30.8 %
それほど重要でない	0	0.0 %
重要でない	0	0.0 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

質問 36 農業機械のほかに何が農業効率化に重要か [2 つまで]

農作業の計画的編成	2	15.4 %
作付面積と施肥の関係	6	46.2 %
その他	5	38.5 %
回答なし	1	7.7 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	107.8 %

質問 37 農業経営において重要なこと。
重要な項目から順番に 1, 2, 3 と付ける。 [3 つまで]

品質のよい農産物	13	100.0 %
効率的な農作業	12	92.3 %
農産物価格動向を知ること	6	46.2 %
農業経営者同士の情報交換	7	53.8 %
その他	1	7.7 %
無回答	0	0.0 %
[人数]		

質問 38 現在の農業経営での心配事 [2つまで]

後継者	2	15.4 %
経営規模 (農地広さ)	2	15.4 %
農業労働者の確保	5	38.5 %
農産物の価格変動	4	30.8 %
その他	4	30.8 %
なし	1	7.7 %
無回答	0	0.0 %
[人数]		

質問 39 農産物の輸送のための交通網の整備

よく整備された	2	15.4 %
大体整備された	8	61.5 %
まだ整備は十分でない	3	23.1 %
わからない	0	0.0 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

質問 40 農産物の販路においてガルアペーの農業経営は適しているか

適している	3	23.1 %
だいたい	2	15.4 %
ふつう	0	0.0 %
あまり適していない	6	46.2 %
その他	1	7.7 %
無回答	1	7.7 %
[人数]	13	100.1 %

質問 41 農産物の共同配送・共同出荷をしているか

している	0	0.0 %
限られた作物についてする	1	7.7 %
しない	12	92.3 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

アルゼンチン共和国ガルアペー計画入植地に関する調査報告

質問42 出荷のタイミングは、農産物の価格等の経済状況をチェックしているか

良くチェック	3	23.1 %
大体チェック, しないときもある	3	23.1 %
あまりチェックしないが, たまにするときもある	2	15.4 %
全然チェックしない	5	38.5 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.1 %

質問 43 農作物は国内向けか, それとも海外向けか

すべて国内向け	4	30.8 %
主に国内向け, 一部海外向け	2	15.4 %
主に海外向け, 一部国内向け	7	53.8 %
すべて海外向け	0	0.0 %
わからない	0	0.0 %
無回答	0	0.0 %
[人数]	13	100.0 %

質問 44 農業経営の全般についての意見の自由記述については, 本文中で説明しているので省略した.

付属資料 2: アンケート調査協力の依頼

2012 年 7 月 20 日

日本人会御中

ガルアペー移住者子弟へのアンケート調査へのご協力のお願い

熊本学園大学 (旧熊本商科大学) 経済学部

慶田 収

1. 調査目的

ガルアペー入植地に関しては、これまでに入植を呼びかける『アルゼンチンは招く ミシオネス州と日本人』と入植がはじまって 10 年後に『ガルアペー移住地 10 周年記念誌』という冊子が出版されました。これらの冊子によってガルアペー入植地での入植者皆様の活動の様子を知ることができました。今回、入植者の子弟の皆様の、その後の活動の経過 (入植の定着化) を把握するとともに、今後の展開としてガルアペーがどのように進んでいく (変化を遂げる) のかを記録にまとめたいという目的で調査を企画いたしました。

2. 調査内容

大きく分けると、次の項目に分けることができます。質問事項でもっとも多いのが「5. 現在の農業あるいは農業経営、今後の方針について」です。

1. 世帯の一般的な構成について
2. 日本人・日系人としての体験、コミュニティとしてのガルアペーについて
3. 最初の入植者 (皆さんのご両親) に関する質問 (わかる範囲で答えて欲しい)
4. 入植後の経過について
5. 現在の農業あるいは農業経営、今後の方針について
6. 現在の作付けの農作物の作付面積、収穫量、家畜の数、農機具の種類と数などの質問について

このようなアンケート調査とともに直接お会いして話をお聞きすることができることを願っております。

なお、アンケートの個々の質問項目については、さらに検討する必要があるかもしれませんが、アンケート項目が具体的にどのようなものか知っていただくためにも、現段階でのアンケートの用紙もお送りします。もし質問項目にアンケート調査にふさわしくない項目、内容等がございましたら、ご指摘いただけますならば、変更・修正いたします。

ご多忙のなか誠に恐縮ではございますが、調査の趣旨をご理解の上、調査にご協力下さいますようお願い申し上げます。

付属資料 3: アンケート調査用紙

2012 年 8 月

ガルアペー移住者子弟へのアンケート調査

ガルアペー入植地に関しては、これまでに入植を呼びかける冊子『アルゼンチンは招く ミシオーネス州と日本人』から入植がはじまって 10 年後に『ガルアペー移住地 10 周年記念誌』が出版されました。これらの冊子によってガルアペー入植地への入植者皆様の活動の様子を知ることができました。今回、入植者子弟の皆様の、その後の活動の経過（入植の定着化）を把握するとともに、今後の展開としてガルアペーどのように進んでいくのかを記録としてまとめたいという目的で調査にまいりました。日々の作業のご多忙のなか誠に恐縮ではございますが、調査の趣旨をご理解の上、調査にご協力下さいますようお願いいたします。

熊本学園大学経済学部

慶田 収

E-Mail: keida@kumagaku.ac.jp

なお、本調査結果は、この目的以外には使用いたしません。また、記入された内容については、秘密を厳守いたします。

以下の質問事項では、選択肢の ☐ に✓（チェック）するか、(☐) または に記入してください。

初めに氏名をご記入ください。

氏名 ()

A あなた自身について

1. あなたはここに入植した世代 (1 世代目) から数えて何世代目ですか？

1 世代目, 2 世代目, 3 世代目, その他 ()

2. あなたは現在何歳ですか？ () 歳

3. 現在の職業は何ですか？ 農業, その他 ()

4. 一緒に住んでいる家族は何人ですか？ 2 人, 3 人, 4 人, 5 人,
その他 () 人

5. 家族構成を教えてください。

()

6. 現在の場所に住んで何年になりますか？ () 年

7. あなたは、日常、日系人であることを意識していますか？

強く意識している, 少し意識している, あまり意識していない,
全然意識していない

8. あなたは日系人であることで得をしたことがありますか？ ある, ない

「ある」と答えた方にお尋ねします。どのようなことで得をしましたか？

9. あなたは日系人であることで損をしたことがありますか？ ある, ない

「ある」と答えた方にお尋ねします。どのようなことで損をしましたか？

10. あなたは日本とのかかわりを意識することがありますか？ はい, いいえ

「はい」と答えた方にお尋ねします。どのようなときか具体的にお聞かせください。

()

B Garuhape 入植地と生活面・コミュニティ

11. Garuhape 入植地では1つのコミュニティとして行事的なものをしていますか？

はい, いいえ

「はい」と答えた方にお尋ねします。どのようなものですか？

()

12. Garuhape 入植地ではコミュニティとして何か積極的にしていることがありますか。

ありましたら、ご記入ください

13. Garuhape 入植地の人々は、コミュニティとして連帯感がありますか？

大変ある, ある, あまりない, 全くない

アルゼンチン共和国ガルアペー計画入植地に関する調査報告

14. 生活の場として Garuhape 入植地は住みやすいところですか？

大変住みやすい、 だいたい住みやすい、 住みにくい、 その他
なぜそうなのか、具体的にお教えてください。

()

15. Garuhape 入植地および周辺に公共的な施設 (学校, 病院など) は 20 年前と比べて充実してきましたか? 充実した, 充実してきた, まだ不十分である

「充実した」、「充実してきた」と答えた方にお尋ねします。どのような施設が充実してきたか教えてください。

()

「まだ不十分である」と答えた方にお尋ねします。どのような点でまだまだなのにお教えください。

()

16. Garuhape 入植地から他の町に行くのに交通の便は以前とくらべて改善されましたか。

かなり改善された、
徐々に改善されて良くなっている、
まだまだである、
改善には程遠い

この点について具体的にお教えてください。

--

17. あなたは生活の場としてこれからも Garuhape 入植地に住み続けたいと思いますか？

そう思う、 少し思う、 あまり思わない、
 いいところがあれば他に移りたい

この点について何か意見がありましたら、ご記入ください。

--

18. 現在、一番望むものは何ですか？

--

C 農業経営の入植者世代からあなたへの継承、今後の展望について

19. 入植者世代は海外移住事業団の募集に応じて来亜されたことと存じますが、その目的は何だったのかご存知ですか？ご存知でしたらお答えください。

農業開拓の志、生活安定のため、農業研修生として、
技術者として、その他（ ）

20. 入植者世代はアルゼンチンに来る前、日本ではどのような職業をしていましたか？
（ ）

21. 入植世代の日本での職業は、移住後の開拓・農業に役立ちましたか？

役立った、だいたい役立った、
あまり役立たなかった、全然役立たなかった。

22. 入植世代からあなたに至るまでの間、農業経営は順調に進んでできましたか。

はい、いいえ

「いいえ」と答えた方にお尋ねします。どのような大変なことがありましたか？

金銭面（資金繰り）の問題、農作物の価格の変動による収入が不安定、
天候不順などによる農作物の不作、新しい試みでの失敗、6. その他
具体的にお教えてください。

23. これまで農業経営で作物、経営の方法などで何か大きな転機がありましたか？

転機があった、ない

「転機があった」と答えた方にお尋ねします。それは、いつごろ、どのような転機だったのか、お聞かせください。

24. 1985年の「移住地農家経営調査地区統計表」によると、ガルアペーでは所有地のうち平均して50%の土地が未開墾となっていました。現在、あなたの土地はどのような状況でしょうか。

開墾地面積（ ）ha、未開墾地（ ）ha

未開墾地がある方にお尋ねします。なぜ未開墾地があるのは、何かの目的があってそうなのか、お聞かせください。

（ ）

アルゼンチン共和国ガルアペー計画入植地に関する調査報告

25. これまでの農業経営の中で何が一番変化しましたか。

作物の変化, 機械化, 農業経営全般, その他 ()

26. Garuhape 移住地はすでに開拓・開墾の時代は終わって、新たな飛躍の時代に入ったと思いますか？

あらたな飛躍の時代になった, だいたい終わった, まだ開拓は続いている,
その他 ()

「新たな飛躍の時代になった」, 「だいたい終わった」と答えた方にお尋ねします。開拓・開墾の終わりはいつごろなのか, また新たな飛躍とは何なのかお教えてください？

D 現在の農業について

27. 現在, 農業経営の規模はどれくらいですか？

農地面積 () ha

農作業従事者 () 人

うち常時, 雇用している雇用農 () 人,

一時的に雇用している家族以外の雇用農 () 人

28. あなたは農業を継ぐうえで, 農業, および農業に関連した専門知識をどのようにして得ましたか？

高校, 大学, 研修所, 独学, 前の世代 (親) から学んだ

その他 ()

「高校, 大学, 研修所」のいずれかを答えた方にお尋ねします。具体名をお教えてください。
()

29. 28.で「高校, 大学, 研修所」のいずれかを答えたかにお尋ねします。学んだ知識は役に立っていますか？

たいへん役立っている, だいたい役立っている, 少しは役立っている,
役立っていない。

この点について, なにか付け加えることがあったら記入してください

()

30. アルゼンチンで農業を続けるには、たんに農業の知識だけでいいですか？

はい、いいえ

「いいえ」と答えた方にお尋ねします。どのような知識が必要ですか？

経理・簿記、 経済的な見方、 その他 ()

31. 農業経営者の仲間との情報交換などは、農業経営にとって重要ですか？

とても重要である、 だいたい重要である、

重要な時もあればそうでないときもある、 あまり重要でない、

全然重要でない、

どのような情報が重要ですか、ご記入ください。

()

32. 農業団体、親睦会などからの農業経営の指導などがありますか？ あり、 なし

「あり」と答えた方にお尋ねします。農業経営の指導は、どのような内容ですか？

()

33. 政府・農業団体などからの作付け指導、制限、あるいは補助金等による誘導はありますか？

あり、 なし、

「あり」と答えた方にお尋ねします。どのような誘導ですか？

()

34. Garuhape 入植地では、コミュニティとして農業のことで何か積極的に活動していることがありますか？ あり、 なし、

「あり」と答えた方にお尋ねします。どのような活動ですか？

()

35. 農業において農業機械は生産性向上のために重要ですか？

重要である、 だいたい重要である、 それほど重要でない、 重要でない

「重要である」、「だいたい重要である」と答えた方にお尋ねします。どのような農業機械が重要なのか具体的にお教えください。

()

36. 農業の効率化において農業機械のほかに何が重要と考えていますか、ありましたら、お教えください。

農作業の計画的な編成、 作付面積と施肥の関係、

その他 ()

アルゼンチン共和国ガルアペー計画入植地に関する調査報告

37. 農業経営において重要なことは何ですか？下記の項目で重要と考える項目から順番に 1, 2, 3 の順序で番号を入れてください。

() 品質の良い農産物, () 効率的な農作業,
() 農産物価格の動向を知ること, () 農業経営者同士の情報交換
() その他 ()

38. 現在の農業経営での心配事は何ですか.

後継者、経営規模（農地の広さ）、雇用農の確保、農産物の価格変動、
その他（ ）

選んだ項目について、具体的にお教えてください。

()

39. 現在、農産物の輸送のための交通網は整備されていますか？

よく整備された, だいたい整備された, まだ整備が十分でない,
分らない,

選んだ項目について、具体的にお答えください。

()

40. 農産物の販路において、現在のガルアペーは農業経営するのに適していますか？

適している、 だいたい、 ふつう、 あまり適していない、 その他
 どの項目について、 なぜなのか具体的にお教えてください。

41. 農産物の出荷について共同配送・共同出荷しますか？

はいします。限られた作物についてします。いいえ、しません

「2. 限られた作物についてしています」と答えた方にお尋ねします。どのような作物を共同配送・共同出荷していますか

42. 農産物の植え付け、出荷のタイミングを考えるうえで、農産物の価格等の経済状況をチェックしていますか？

良くチェックしている、 だいたいチェックしているが、しないときもある、

あまりチェックしないが、たまにチェックするときもある、 全然チェックしない

「全然チェックしない」と答えた人以外の方にお尋ねします。どのような作物についてチェックしますか？作物の名前を挙げてください

43. 現在栽培している農産物は国内向けですか、それとも海外向けですか？

すべて国内向け， おもに国内向けだが，海外向けもある，
おもに海外向けだが国内向けもある， すべて海外向け， わからない
どのような作物が国内向けで海外向けなのか， ご存知でしたら，作物名を挙げてください.

--

44. 農業経営の全般に関して何か付け加えることがありましたら，自由にご記入ください.
アンケート調査にご協力いただき，誠にありがとうございました.

--

アルゼンチン共和国ガルアペー計画入植地に関する調査報告

現在の農業経営について
農業作物

	コード	名称	主たる生産物に✓	作付面積ha	年間収量kg	年間販売数量kg	
永年作物	15	カンキツ					
	43	マテ茶					
	20	桃					
	50	アブラギリ					
	19	ブドウ					
		紅茶					
短期作物	95	タバコ					
	1	トマト					
	57	ザツマメ					
	53	トウモロコシ					
	39	パイナップル					
	50	スイトウ					
	54	マンジョカ					
	8	ピーマン					
	93	大豆					
植物(木材等)	コード	名称	主たる生産物に✓	面積ha	年間収量kg	年間販売数量kg	
	90	パラナマツ					
	91	エリオソテマツ					
	94	ユウカリ					

慶 田 収

畜産	コード	名 称	主たる生産物に✓	頭数	年間収量kg	年間販売数量kg	
	11	乳牛					
		馬					
		豚					
		鶏					

大農具・車両

コード	名 称	数量(台)	使用年数(年)
1	トラック		
2	乗用車		
10	トラクタ		
87	製材機		
16	ハロー		
86	チェンソー		
53	選別機類		
15	ブラウ		
85	農用連暖房装置		
38	草刈り機		
35	動力噴霧器		
5	トレーラー(アタッチメント)		
37	スピード・スプレア		

Summary

Survey on a Planned Colony, Garuhape in Argentina
- Results of Questionnaire on Immigrant
Settlers and/or Their Children -

I performed an attitude study on immigrant settlers and/or their children by questionnaire to the first planned colony of Argentina, Garuhape in Province Misiones in August, 2012. This survey is to investigate the change of Garuhape colony after fifty years of the first settlement and the present agriculture through the attitude survey. The results of survey are elliptically as follows.

While settlers advanced to develop and cultivate their plots by theirselves in pioneering phase, they installed public infrastructures such as power distribution, and they made the system of joint fruit sorting and joint delivery of agricultural products, especially a mandarin orange under spirit of collaboration and cooperative, which formed a community of Garuhape through “agricultural development.” The present day after fifty years when settlers’ families have decreased, the cooperative management of joint fruit sorting and joint delivery of a mandarin orange has been lost, and now each family is to cope with farm operation individually. The time has changed from the pioneering age that families had no other choice of collaboration for development to the age that farm families become “ordinary farmhouse” in a sense. The Japanese immigrants and their descendent community in Garuhape also has pivoted from “agricultural development” to “Japanese and Japanese descent”, and it gropes for how the Japanese and the Japanese descent maintain its identity by way of transition of Japanese culture to the next generation.